



TITLE:

四月の星の空

AUTHOR(S):

CITATION:

四月の星の空. 天界 1927, 7(73): 144-146

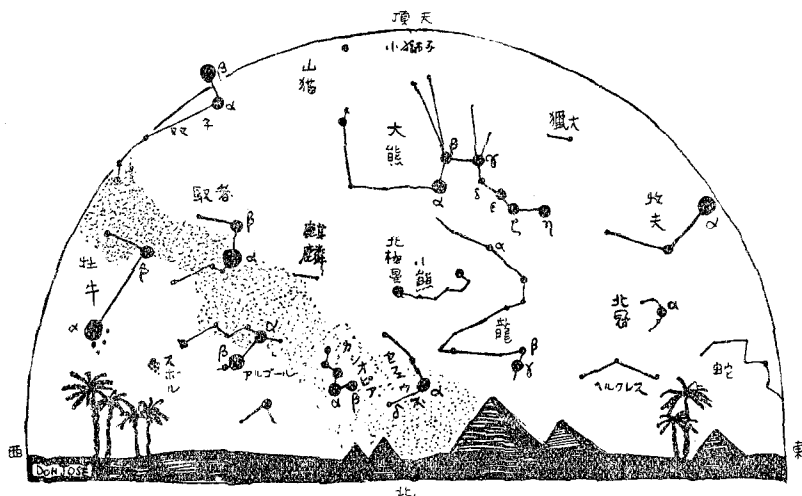
ISSUE DATE:

1927-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161098>

RIGHT:



四月の星の空

(北 半)

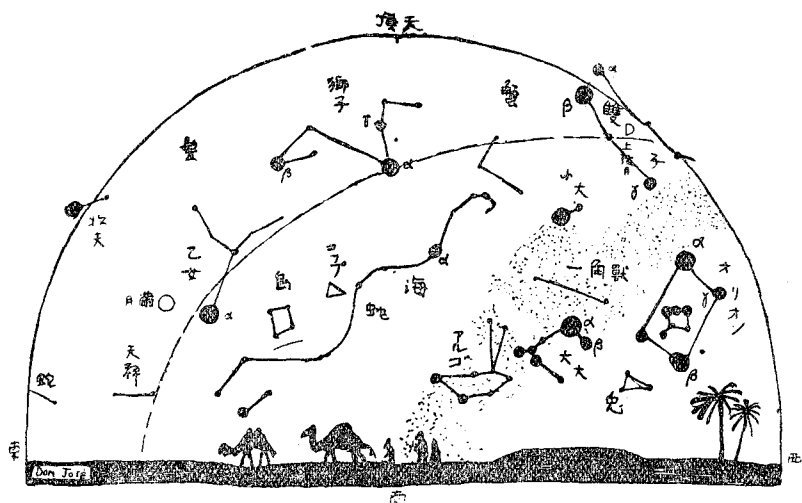
カシオペアとセフェスは低く沈み、其の代りに、おほくまが今や勇しく中天に上つて來た!!

春の夕の微風を浴びながら、星空の神祕に接するのも、吾等の喜びである——

あらゆる星々と共に、日週運動を見せてくれるこの最も明瞭な北斗七星が、夜を徹して見えるのであるから、

最も簡易な天文の第一歩を學び始めるのも今が宜からう。

それにしても、「星が動く」と見るのは餓りで、「大地の方が漸次西から東へ傾き続けるのだ」と眞に心の底から悟り得る人が果して幾人ある？



四月の星の空

(南 半)

獅子は今正に子午線に迫つて、其首星レガルスは全天の主人顔をしてゐる。

乙女は其の左から之れを追ひ、牧夫もあまに續く。

南天に蜿々ま全身を横たへる海蛇、コップ鳥など——

皆之れば、地上世界の百花と共に、「春」を象徴する宇宙相である。

冬の天を我が物顔に誇つてゐたオリオンと大犬小犬たちは力なく西へ西へ

と降り行く。



ケンブリチ大學チャペルに立つニウトン像